

実践報告

保育内容（造形表現）の理論と方法及び図画工作の授業改革 ～保育士養成課程の見直しに基づく指導方法の工夫・改善～

牛丸 和人

（西九州大学短期大学部 幼児保育学科）

（平成 31 年 1 月 7 日受理）

**The Class Reform of Theory and Way of a Nursing Detail “Artistic Expression”, Arts and Crafts - Device
Improvement of Educational Method Based on Reconsideration of a Nurture Man Education Course**

Kazuto USHIMARU

（ Department of Child Care and Early Childhood Education, Nishikyushu University Junior College ）

（Accepted January 7, 2019）

キーワード：保育士養成課程 指導者の資質向上 保育内容（造形表現）図画工作
アクティブラーニング 子どもの発達段階 造形領域

I はじめに

保育士養成課程検討会は、時代の変化や社会の要請を踏まえ、今後の保育士に必要な専門的知識及び技術を念頭に置きつつ、保育士養成課程を構成する教科目(名称や授業形態・単位数・目標・教授内容等)の見直しに向けた検討を行ってきた。また、当該見直しに伴う保育士試験に係る試験科目(出題範囲を含む)等の見直しについても、併せて検討を重ねてきた。そして2017年12月4日に「保育士養成課程等の見直しについて～より実践力のある保育士の養成に向けて～(検討の整理)」の詳細が示された。

私は昨年(2018年)10月に前任教授との共著で、本学における「表現(造形)」「図画工作」の授業改革の契機とするために「これからの保育士養成における領域表現(造形)指導における提案」を論じた。そして、その文末では提案内容を実践につなげ、その成果と課題を考察することを約束した。その論文の趣旨と今回の保育士養成課程検討会からの提言を踏まえ、「保育内容(造形表現)の理論と方法」「図画工作」における実践内容及びその成果と課題について報告したい。

II 「保育内容の理解と方法」の見直しのポイント

今回の見直しにおいて「保育内容の理解と方法」における目標や内容は以下のように示された。

保育内容の理解と方法(演習・4単位)

<目標>

1. 子どもの心身の発達や子どもを取り巻く環境等と保育所保育指針に示される保育の内容を理解した上で、子どもの生活と遊びを豊かに展開するために必要な知識や技術を実践的に習得する。
2. 保育における教材等の活用及び作成と、保育の環境の構成及び具体的展開のための技術を実践的に習得する。

<内容>

子どもの心身の発達や子どもを取り巻く環境等と、保育所保育指針に示される保育の内容を踏まえて、子どもの生活と遊びにおける体験(※)と保育の環境を捉え、以下の知識・技術を学ぶ。

1. 子どもの生活と遊びにおける他者(保育士等や他の子ども)との関係や集団の中での育ちの理解と援助に関わる知識及び技術
2. 子どもの生活や遊びにおいてイメージを豊かにし、感性を養うための環境の構成と保育の展開に必要な知識及び技術
3. 子どもの生活と遊びにおける様々な遊具や用具、素

材や教材等の特性の理解と、それらの活用や作成に必要な知識及び技術

※子どもの生活と遊びにおける体験の例

- ①見立てやごっこ遊び、劇遊び、運動遊び等における体験
- ②身近な自然やものの音や音色、人の声や音楽等に親しむ体験
- ③身近な自然やものの色や形、感触やイメージ等に親しむ体験
- ④子ども自らが児童文化財(絵本、紙芝居、人形劇、ストーリーテリング等)に親しむ体験

III 授業改革の実際

前述の論文「これからの保育士養成における領域「表現(造形)」指導における提案」及び保育士養成課程検討会からの提言を受けて、本年度4月からの授業実践における改革の実際を紹介する。

1 シラバスの抜本的な改訂

筆者が主として担当する「保育内容(表現)の理解と方法」「保育内容(造形表現)の理解と方法」「図画工作」のシラバスを抜本的に修正した。前年度までのシラバスは、主としてそれぞれの学生の描画技術、表現技法のスキルの向上に重点が置かれていた。例えば「色彩表現におけるグラデーション技法の習得」「木版画技法の習得」「イラストレーションにおける構成力の育成」等である。これらは造形表現に係る授業において大切な教材ではあるが、保育士を目指す学生を対象にした授業の教材という点では課題がみられた。保育士の指導・支援の対象となる園児たちの発達段階を考えた場合に、果たして芸術学部や中学校、高等学校の美術教師を目指す学生たちが学ぶような教材が、保育士養成において最適のものであるかということである。そこで今回シラバスを抜本的に改訂した。以下は「保育内容(造形表現)の理論と方法(1年生・後期)」のシラバスの一部である。

- | | |
|----------------|------------------|
| (1) 科目名 | 保育内容(造形表現)の理論と方法 |
| | ec-c2-12 |
| (2) 担当者 | 牛丸 和人 |
| (3) 開設学科 | 幼児保育学科 |
| (4) 分類 | 専門教育科目 選択科目 |
| (5) 佐賀C | 1年 後期 2単位 選択必修 |
| (6) 授業の概要及びねらい | |

幼児期の造形表現に関する理論を学び、幼児の感性や創造性を豊かにするための造形遊びや環境の構成について実践的に学び、活動を支援するための知識・技能・表現力・対話力(コミュニケーション能力)を身

- につける。
- (7) 授業の到達目標
- ア 幼児の造形表現に関する基本的な理論や技能を身につけ、幼児の表現活動に生かすことができる。
- イ 領域「表現」（造形）の特性を理解し、体験と関連させながら教材や道具を選択できる。
- ウ 具体的な保育を想定した指導案を作成することができる。
- エ 協働的な学びを通して対話力を高め、チームで課題を解決することができる。
- オ 造形表現に関する保育現場の実情を知り、課題解決に向けた構想を練ることができる。

(8) 学習方法

領域「表現」（造形）に関する基本的な理論や方法論を講義や実践を通して学ぶと共に、主体的・対話的な学びのスタイルによって協働して課題解決していく力や対話力（コミュニケーション能力）を高める。

第1週

- 事前 シラバスを確認しておく。
- 授業 オリエンテーション：本講義の内容、流れ、めあてを知る。
- 事後 本講義における自己目標を立てる。

第2週

- 事前 ペープサートについて予習しておく。
- 授業 対象年齢をふまえて、ペープサートのストーリーを考える。
- 事後 活動を振り返り、ワークシートをまとめる。

第3週

- 事前 ペープサート作成に必要な材料を揃えておく。
- 授業 ストーリーを考え、キャラクターデザインをする。
- 事後 ワークシートをまとめる。

第4週

- 事前 キャラクターデザインのアイデアを練っていく。
- 授業 ペープサートの制作（キャラクター・舞台）
- 事後 ワークシートをまとめる。作品を保管する。

第5週

- 事前 キャラクターや舞台のアイデアを練っておく。
- 授業 キャラクター・舞台制作の完成
- 事後 活動を振り返り、ワークシートをまとめ作品を保管する。

第6週

- 事前 「模擬授業」に備えストーリーや台詞を考え練習しておく。
- 授業 ストーリー・台詞・動きの確認と練習

- 事後 活動を振り返り、ワークシートをまとめる。
- 第7週
- 事前 テキスト・ワークシートを読んでおく。
- 授業 自作のペープサートを取り入れた指導案（略案）の作成
- 事後 指導案の内容を振り返り次時に備える。
- 第8週
- 事前 指導案を検討しておく。
- 授業 自作のペープサートを取り入れた保育場面の指導案の完成
- 事後 指導案の内容や参考作品を点検する。
- 第9週
- 事前 指導案や参考作品を完成させておく。
- 授業 自作のペープサートを使った「模擬授業」（発表会①）
- 事後 活動を振り返り、ワークシートをまとめ作品を保管する。
- 第10週
- 事前 指導案を完成させ及び模擬授業の練習をしておく。
- 授業 自作のペープサートを使った「模擬授業」（発表会②）
- 事後 活動を振り返り、ワークシートをまとめ作品を保管する。
- 第11週
- 事前 壁面構成に関するテキストを読んでおく。
- 授業 テーマに応じた壁面構成のアイデアを練る。
- 事後 活動を振り返り、ワークシートをまとめ作品を保管する。
- 第12週
- 事前 配布資料を読んでおく。
- 授業 「ペーパー・コラージュ」の演習を通して造形表現とコミュニケーションとの関連について体験する。
- 事後 「ペーパー・コラージュ」に対する感想と自己課題をまとめる。
- 第13週
- 事前 自分の制作に必要な資料などを揃えておく。
- 授業 グループワークによる壁面構成①
- 事後 活動を振り返りワークシートをまとめる。
- 第14週
- 事前 完成をイメージし、必要な材料をチェックしておく。
- 授業 グループワークによる壁面構成②
- 事後 自己評価、他者評価により成果と課題をまとめる。
- 第15週
- 事前 ワークシートや作品を整理しポートフォリオ

をまとめておく。

授業 各グループの作品を相互評価し合う。

全授業を振り返り成果と課題をまとめる。

事後 ワークシートや作品を提出する。

このように造形表現の技法演習的な内容をできる限り排除し、「指導案の作成」「模擬授業」「作品発表（プレゼンテーション）」といった保育現場で求められる指導上のスキルを高めるための内容を多く設定した。このことは、保育実習、教育実習に向けての意識づけにもつながっている。造形活動に対する意識を知るために年度当初の1年生（回答者96名）に対するアンケート結果は以下の通りであった。

「美術・図画工作が得意である。」 (4%)

「美術・図画工作がどちらかと言えば得意である。」 (11%)

「美術・図画工作がどちらかと言えば苦手である。」 (71%)

「美術・図画工作が苦手である。」 (14%)

1年生の85%が苦手意識を持っていることを踏まえ、高等学校以前の図画・工作や美術における基礎的な技法の学び直しの内容も設定した。

2 アクティブラーニング型授業の推進

昨年度までの各々の表現技術中心型のカリキュラムから保育士としての即戦力育成型に改訂した。そして、授業スタイルは「主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング型授業）」とした。アクティブラーニング型授業については、小・中・高等学校の学習指導要領にとどまらず、認定こども園教育・保育要領では、園児が様々な人やものとの関わりを通して、多様な体験をし、心身の調和のとれた発達を促すようにしていくこと。その際、園児の発達に即して主体的・対話的で深い学びが実現するようにするとともに、心を動かされる体験が次の活動を生み出すことを考慮し、一つ一つの体験が相互に結び付き、幼保連携型認定こども園の生活が充実するようにすることが示されている。また、幼稚園教育要領では、幼児が様々な人やものとの関わりを通して、多様な体験をし、心身の調和のとれた発達を促すようにしていくこと。その際、幼児の発達に即して主体的・対話的で深い学びが実現するようにするとともに、心を動かされる体験が次の活動を生み出すことを考慮し、一つ一つの体験が相互に結び付き、幼稚園生活が充実するようにすることが示されている。即ち幼児教育から高等教育まで串刺しで求められている。学生の「①知識・技能②思考力・

判断力・表現力③学びに向かう力や人間性」を育成すると共に、近い将来保育士としてもアクティブラーニング型の学びを推進していく上で、アクティブラーニング型授業を体験させておく必要がある。ただしここで留意すべきは、やみくもにグループワークを取り入れることによる弊害である。つまり、ペアワークやグループワークによって一方的に発言が否定されたり揶揄されたりすることは避けなければならない。したがって、ペアワークやグループワークの際には「話し合いの約束（ルール）」を繰り返し指導し、安心して話し合える関係を指導者が意図的に醸成していく必要がある。

3 ICT機器の利活用による指導の工夫

(1) 拡大投影機活用によるプレゼンテーション

ICT機器の活用能力は、当然就学前教育に携わる保育士にとっても必要な能力である。そしてこれらの能力は、子どもたちの活動をサポートする際にその威力を発揮する。多くの学生は高校時代までにPC本体の操作方法、ExcelやWord、PowerPoint等の入力方法の基本はマスターしている。しかしながら、そのスキルを保育現場でいかに活用していくのかというところまで意識している学生は少ない。この現状を踏まえ、授業において積極的に「効果的なICT機器を利活用した指導方法」のモデルを示すことにした。今回の実践では拡大投影機による作品発表会（プレゼンテーション）及び相互評価会を導入した。個々の作品をスクリーンに大きく投影して園児の対象年齢、材料、指導上の留意点などについての発表と質疑応答を行った。（図1 図2）



図1 拡大投影機によるプレゼンの様子①



図2 拡大投影機によるプレゼンの様子②

(2) 「デジタル紙芝居」の制作

子どものために「紙芝居」を制作する場合にも、これまでの一般的な大きさにこだわる必要はない。紙芝居の大きさには限界がある。そこで、広い場所で、より多くの子どもたちにストレスなく鑑賞させる方法として、B6～B5程度の画用紙に描いた絵画をパソコンに取り込み、PowerPointによって電子黒板やスクリーンに投影したり、拡大投影機で鑑賞させたりする「電子紙芝居」に挑戦させた。制作する画用紙の大きさが小さくなるというのは、学生たちにとってストレスの軽減につながったようで、積極的に取り組む姿が多くみられた。作品の中には「コラージュの技法」を取り入れるなど（図3）前時の学びを生かす学生も出てきた。拡大投影機を利用した学生（図4）は、スクリーンいっぱいに映し出された自分の作品を観て「紙芝居にPowerPointや拡大投影機を使うということの効果に気づかされた。保育現場でもICT機器を活用した指導方法を工夫していきたい。」という感想を述べた。（図5）



図3 学生が制作したデジタル紙芝居の原本



図4 拡大投影機の利用による投影の様子

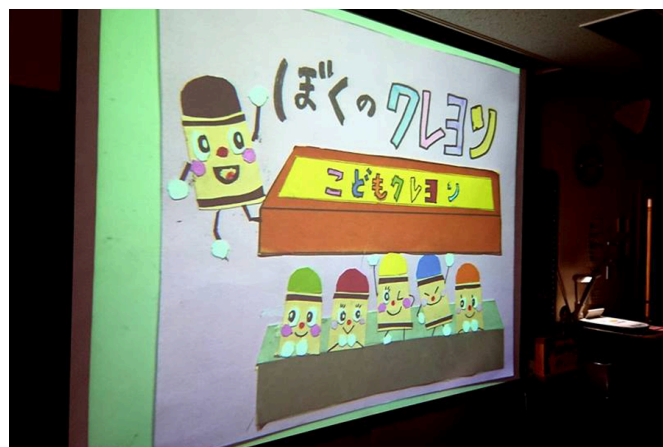


図5 PowerPointの利用による投影の様子

(3) コミュニケーション能力向上に関する授業の工夫

文部科学省（初等中等教育局児童生徒課）は平成21年9月11日の「子どもの徳育に関する懇談会」における「子どもの発達段階ごとの特徴と重視すべき課題」の中で、乳児期の重要課題として次の5点をあげている。①愛着の形成②人に対する基本的信頼感の獲得③基本的な生活習慣の形成④十分な自己の発揮と他者の受容による自己肯定感の獲得⑤道徳性や社会性の芽生えとなる遊びなどを通じた子ども同士の体験活動の充実・・・これらの提言は、幼児期における造形領域の指導、支援においても意識されなければならない。就学前の子どもたちの造形活動は、小学校における図画工作や中学校における美術と異なり、評価の対象ではなく遊びを通じた学びの一環であるということを忘れてはならない。V. ローウェンフェルドの言葉を借りれば「子どもたちが表現の手段として表出させた絵画に対して、デッサン力や色遣いという表出されたレベルだけでなく、それぞれの表現に込められた子どもたちの思いを聴きとり、共感できる

こと」のできる保育士を育成するカリキュラムを工夫する必要がある。そこで新しく取り組んだのが、保育園・幼稚園・子ども園で実際に園児が描いた絵画を使った「作品の鑑賞と声かけの模擬授業」である。今回は、積極的に造形活動を教育に取り入れている幼保連携型認定こども園「柳川幼稚園」から園児の作品（図6）を借用し、模擬授業で使用した。（図7）



図6 柳川幼稚園での園児の制作風景



図7 園児の作品を使った声かけの模擬授業

模擬授業における禁句は次のような言葉である。
「すごいね。」「上手だね。」「しっかりかけたね。」
「本物みたいだね。」このような曖昧模糊とした表現はできる限り避けるように指導した。逆に積極的に使うとした言葉は次のような言葉である。「先生はここが好き。」などのマイメッセージ、「この色はどうやったら作れたの?」という問いかけ、「この車でどこまで行くのかな?」といった子どものイメージを広げる声かけなど、カウンセリングマインドを意識したコミュニケーションである。この授業後、「絵を描くという活動は、保育士の考える完成作品に近づけることだけが重要なのではなく、活動の過程で子供たちの自己存在感が高まるようなコミュニケーションをとれる時間なのだと気づけた。」とワークシートに振り返っている学生もいた。反

対に「とっさにどのように声をかけてよいか悩んだ。ボキャブラリーの不足を痛感した。」という学生も見られた。保育士養成課程における「保育内容（造形表現）の理論と方法」「図画工作」の授業においては、コミュニケーション能力の育成も大きな課題であることも明確になった。

IV 実践の成果と課題

保育士を志す学生たちのシラバスや、指導方法の工夫改善に焦点を絞り「保育内容（造形表現）の理論と方法及び図画工作の授業改革－保育士養成課程の見直しに基づく指導方法の工夫・改善－」として2017年12月4日に「保育士養成課程等の見直しについて～より実践力のある保育士の養成に向けて～（検討の整理）」及び2018年10月に発表した「これからの保育士養成における領域表現（造形）指導における提案」をもとに、「保育内容（造形表現）の理論と方法」「図画工作」における実践内容及びその成果と課題について報告した。

今回の授業改革による実践の成果としては以下のことがあげられる。

- ・ シラバス（授業カリキュラム）の抜本的な改訂により、個人的な造形表現のスキルアップに留まりがちであった授業内容が保育現場での活用を目標とした内容へと変貌した。
- ・ アクティブラーニング型授業形態により、就学前の造形表現に対する学生の課題意識や課題解決に向けた意欲が高まった。
- ・ ICT 機器（拡大投影機・PowerPoint とプロジェクター）を利活用した指導方法により、世代の保育士に求められる活用能力が高まってきた。

また今後の課題としては以下の点があげられる。

- ・ 制作時の園児に対する声かけや完成作品に対するコメントにおけるボキャブラリーの不足が課題である。カウンセリングマインドを意識したコミュニケーション能力向上のためのカリキュラムや資料、ワークシートの工夫が必要である。
- ・ 授業で身につけた指導スキルを、学生たちが実習以外で試す場（保育園・幼稚園・子ども園・各種施設等）の開発が必要である。
- ・ 小学校における英語活動が2020年から大きく変わる。英語が小学校5、6年生では「教科」となり成績評価され、3、4年生から「外国語活動」が導入される。既にある自治体では小1から独自教科「英語科」を実施しており、今後園児の時期から何らかの形で英語に慣れ親しませることが求められることは想像に難くない。このことを踏まえ、「保育内容（造形表現）の理

論と方法」や「図画工作」の授業において、園児が英語と触れ合い楽しめるような教材の工夫・開発にも取り組ませる必要がある。

以上の成果と課題をふまえ、更に研究実践を継続しながら、未来を見据えた保育士の養成大学としての責務を果たしていかなければならない。

参考文献

- 1) V.Lowenfeld (ヴィクトル・ローウェンフェルド) 著、竹内 清、武井 勝雄、堀ノ内敏訳「“Creative and Mental Growth”「美術による人間形成～創造的発達と精神的成長～」(黎明書房) 1995 p.40
- 2) 「保育所保育指針」文部科学省
- 3) 「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」文部科学省
- 4) 「幼稚園教育要領」文部科学省
- 5) 「小学校学習指導要領」文部科学省
- 6) 「中学校学習指導要領」文部科学省
- 7) 中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中等高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善」2008.1.17
- 8) 保育士養成課程検討会「保育士養成課程等の見直しについて～より実践力のある保育士の養成に向けて～(検討の整理)」2017.12.4
- 9) 牛丸和人・木村安宏「これからの保育士養成における領域表現(造形)指導における提案」(永原学園西九州大学短期大学部紀要 p.29) 2018.11.2
- 10) 奥村高明著「学び!と美術＜Vol.52＞図画工作・美術の見方・考え方」(日本文教出版) 2016